

『ピノッキオの冒険』における人間論

— いのちの誕生をめぐる —

前之園 幸一郎

はじめに

カルロ・コッローディ (Carlo Collodi, 1826-1890. 本名は Carlo Lorenzini) によって「子ども新聞」に断続的に連載されていた「ある操り人形のお話」は、1883年に『ピノッキオの冒険』と題して出版された。この作品は、スピーディーな筋の運びや奇想天外なファンタジーの展開、また簡潔な文章によって児童文学の古典として広く知られている。しかしこの物語に対しては、物言うコオロギによって繰り返されるお説教や決まり文句の教訓がうっとうしいとの批判もある。だが同時に、そこには何か人間や世界の根源的な原理や真実についてのメッセージが描き込まれているようにも思われる。それが、引っ掻き傷のように記憶の片隅に沈潜して痕跡を残し、その違和感がわれわれの目をあらためて『ピノッキオ』に向けさせる。さらに、一見荒唐無稽で明確な根拠もなしに展開する「ピノッキオ」の物語の背後には、控え目ではあるが宗教的なメッセージさえも込められているように思われるのだ。また、著者コッローディが創りだした「ピノッキオ」は、作者の意図や予想をはるかに超えた独自の行動や主張によって、作者に対して多くの皮肉な裏切り行為を行なっているようにも見える。本稿では、著者の手を抜け出し、著者の意図をはみ出して行動する主人公「ピノッキオ」に着目し、「ピノッキオ」が問いかけている問題の意味について考察したいと考える。

I 創造者ジェットと「ピノッキオ」の誕生

『ピノッキオの冒険』は、無意識のうちにわれわれが依拠し、われわれの日常的で基本的な行動原理となっている合理主義、あるいは物質主義への辛辣な批判から始められる。槍玉に挙げられるのは、老人の大工アントニオである。彼は、鼻の先が赤いので桜んぼ親方と人々に呼ばれている。その桜んぼ親方は、仕事熱心で生真面目な人物だ。彼は、余計なこと、無駄なことに心を奪われることはない。また彼は、日常的に見たり触れたりする事柄以外のものに積極的に興味を感じることもなければ、視線を向けることもほとんどない。日常生活において堅実に生きることで、彼は精一杯だ。

その彼の前に、一本の木片が現れた。それは、冬の暖房に燃やされる運命にあるごくありふれた木切れに過ぎない。もしテーブルの脚にでも加工されることになれば、その木にとっては最高の扱いとなるだろう。そのような普通の薪の木片がたまたま存在した。そして、当然のことながら、その木片が言葉を発するなどということは桜んぼ親方にはまったく考えられないことだった。ところが、ある日、桜んぼ親方は、泣いたり笑ったりする木の切れっぱしを見て驚愕し、恐怖のあまりしゃがみこんでしまった。「かわいそうに、こんどは、桜んぼ親方は、まるで雷にでも打たれたように、ひっくり返ってしまった。もう一度眼を開いた時には、床の上にしりもちをついていた。親方は、顔の形まで変わってしまったように見えた。いつもはだいたい赤紫色の鼻の先まで、大きな恐怖のために真っ青¹⁾になっていた」。

桜んぼ親方は、われわれの周りにおおぜいいる。われわれ自身もそうかもしれない。ともかく、彼は律儀で健全な常識の持ち主だ。その彼の日常生活を根底で支える原理は、まず、1) 見ることのできるもの、触れることのできるもののみが真実である。そうでない事柄は、欺瞞であり、錯誤であり、迷信であり、根拠のないものだと考える思想だ。その原則に立てば、2) 日常的に生起することのみが現実の姿であると考えられる。一方、日常的に起こる事柄とは

異なる事態の発生は、何も起こらなかったこととみなされる。つまり、非日常的な事柄の出現は、原則的に見て見ぬふりをされるか、無視されてしまうのだ。声を発する木片など、かりに存在しても、それは何かの間違いであって、そんなものはなかったことにされてしまう。そして当然のことながら、3) 一片の丸太は、ただのありふれた木片以上のものではあり得えない。

原則主義の桜んぼ親方には、理屈の通らないことは認められない。彼の思考はすべてが理詰めであって、およそ現象の背後に神秘を感受する感性に欠けている。したがって、木片が喋り出すなどということは、彼にはあってはならないことなのだ。桜んぼ親方が、驚愕のあまり、茫然自失となったのはしごく当然のことだった。

この桜んぼ親方の思想は、科学的合理主義の立場だ。あるいは物質主義、または部分的合理主義と言ってもいいだろう。実際には、すべて存在するものは単独では存在することはできないのに、この思想には、部分的存在を全体性の観点から眺める視点が欠落している。すべての存在は、全体性の部分であり、全体性の有機的連関の中で固有の個別的価値を持つことになるのだ、とは彼には考えられない。人間の臓器が、われわれの身体の全体的組織から完全に切り離された部分として治療されたり移植されたりするの、このような部分的合理主義の発想による。

桜んぼ親方は、論理的に正しく、何も間違っていない。しかし、残念なことに著しく想像力に欠けている。彼には、山と積まれた薪の木片の一本が、多くの試練を経て人間の子どもに成長するなどはとても思いおぼぬことだった。彼は、目に見えるものの背後に、見ることも触れることもできない、それでいて厳然たる宇宙的秩序が存在するなどとは夢にも思わない。いな、もともとそのような思考の習慣がないのだ。だから彼は、きわめて即物的な態度で木片を取り上げ、「この中に誰か隠れているのかな？」などと覗いてみたりする。そして、その理知的、合理的思考のゆえに木片が持つ限りない可能性を見落とし、「ピノッキオ」の誕生に立ち会う貴重な機会を逸してしまうのだ。

ところが、これに対してジェppetは違った。『ピノッキオ』の物語の最

初と最後の数章にのみ顔を出す「ピノッキオ」の父親ジェッペットは、桜んぼ親方とは異なり人間存在の根源について鍵を握る重要な人物として登場する。ジェッペットと桜んぼ親方は、体格や姿形こそ似通っているが、その外見上の類似点を別にすれば、二人はまったく異質の人間だ。ジェッペットは、「私は、かわいい木の操り人形を自分のためにつくろうと思っている。それも、踊ったり、剣をふりまわしたり、とんぼ返りをうったりすることのできるすばらしいやつをなんだ³⁾と、一本の丸太から生きて動き回る人形を彫り出したいと当初から想像力をふくらましている。ジェッペットは、物語への登場の最初から明確に自分の計画を頭に描いているのだ。

このことは、「ピノッキオ」の誕生が偶然の産物ではないことを意味している。「ピノッキオ」は、存在する以前から待ち望まれていたのだ。深い熟慮による決断が彼の誕生の前に存在したのである。これは、われわれ人間の誕生をめぐる根源的な問題でもあり、また問いでもある。私という人間の歴史は、偶然によって始まったのだろうか。あるいは、あらかじめ計画されていたことなのだろうか。絶対者としての神の計画は永遠である。だとすると、その計画においてはいかなる存在も突然に現れるということはある得ないだろう。しかし、神の計画が永遠ではあっても、それは神秘につつまれており、人知のおよばぬ絶対的存在による自由な計画だ。人間に起源を与える神の決定には人間の都合を考えた根柢などない。それゆえに、われわれ人間の目にはそれが不条理に思われることもしばしばだ。

となると、私の存在は宇宙における真の神秘である。創造を決意した神の姿はわれわれ人間の理解を超えている。そして創造者は、隠れて存在している。われわれが知り得るのは、ただ私がここにいることが創造者の存在を明らかにしているということだけだ。そして、ともかくわれわれは、神によって個体的、身体的な生命と、身体を超えて受け継がれ生まれ変わる個としての宇宙的「いのち」とを与えられている。

ジェッペットによる「ピノッキオ」の創造も、まさに生命の誕生として描かれる。

なによりもジェッペットには、自分の作品を制作する決意があらかじめ存在していた。そして、その創造の決意には、さらにその被造物の父親となる決意が明確に伴っていた。ジェッペットは、木片を削る仕事に着手する前に、その丸太を人に対するようにやさしく撫でまわし、「こいつに、なんという名をつけようかな？」とつぶやき、⁴⁾しあわせになる名前をつけてやる。しかし、まだ仕事が終わらないうちから手におえないいたずらをする「ピノッキオ」に対して、ジェッペットは思わずもらしてしまう。「こら、いたずら息子よ！まだすっかり仕上がりもしないうちから、もう父親をばかにしはじめる！いけないことだよ、坊や、ほんとうにいけないよ！」⁵⁾。

「ピノッキオ」は、「いたずら息子」と呼びかけられた。息子として認知され、受け入れられたのだ。「ピノッキオ」は、創造者のたんなる作品であるだけでなく、その息子としての位置が与えられ、創造者との特別な関係に入る使命を与えられた。「ピノッキオ」は、被造物であり息子であるという二重の関係において、自己の本性が木である現実と息子としての境遇との困難な調和に立ち向かわなければならない。その矛盾する状態からの超越を求めて『ピノッキオの冒険』は展開されることになる。

ジェッペットは、いまだ製作中途の「ピノッキオ」に散々に苦々しい思いをさせられる。ジェッペットは、すばやく、髪の毛を、つぎにおでこを、そして目をつくった。そして彼は、先ず不思議な目玉に気づいた。その目玉は、動きながら、同時にじっと彼を見詰めている。「目ができあがったとき、その目玉がぐるぐると動いて、じいっと彼の顔を見つめているのに気づいたとき、ジェッペットがどんなに驚いたかを想像して欲しい」⁶⁾。「ピノッキオ」は、周囲を見回しながらも、そのまなざしを自分の関心の中心である父なる創造者に向けている。鼻が仕上がり、口の番になったとき、「口はまだすっかりできあがりもしないうちから、もう笑ったり、ジェッペットをからかったりしはじめた」⁷⁾。「ピノッキオ」の創造者に対する愚弄するようなしぐさは、手におえない反抗へと発展する。ジェッペットが「ピノッキオ」の両足をつくりあげたとき、彼は、ついに「鼻の先をポーンと蹴とばされたようにかんじた」⁸⁾のだ。

(66)

ジェッペットは、思い余って心の中で思わずつぶやく。「当然の成り行きだ！こんなことは、最初に考えておかなくちゃいけなかったんだ！もういまとなっちゃ、あとの祭りさ！⁹⁾」。ジェッペットのこのつぶやきは、「そこで主は、地上に人間をつくったことを後悔し、心の中で悔やまれた」（『創世記』6. 6）という聖書の言葉と同様の響きを持っている。

しかしジェッペットは、もはや今となっては手後れだと思いながらも、自分の手で創造した作品「ピノッキオ」を破壊したり、放棄しようとは決して考えなかった。それどころか、操り人形をだいじに両腕で抱えてそっと床の上におき、歩き方を教えようとする。「ジェッペットは、彼の片手を取って、一歩また一歩と代わりばんこに足を動かすことを彼に教えてやった¹⁰⁾」。古代の預言者も、「わたしは、エフライムに歩むことを教え、彼らをわたしの腕にいただいた。しかし彼らはわたしにいやされた事を知らなかった」（『ホセア書』11. 3）とジェッペットと同様のことを述べている。

II 父親からの逃走と解放された自由の内容

「ピノッキオ」が最初に行なった自発的的行為は、自分にいのちを与えてくれた父親「ジェッペット」の深い愛情から遠ざかることであった。父親なしに自分なりの自由を味わうためである。「両足が思うようになってくると、ピノッキオはひとりで歩きだし、部屋中をかけまわった。そしてしまいには、とうとう家のドアをすりぬけて通りに飛びだし、逃げて行ってしまった¹¹⁾」。

父親の家を逃げ出した「ピノッキオ」が最初に遭遇するのは、世俗的権力の象徴であるカラビニエーレ（巡査）と、不確かにしか知らない事実について無遠慮に余計な判断を押しつけてくる見物人たちの野次馬的世論の暴力である。暴れ馬が逃げ出したものと勘違いしたお巡りさんは、道の真ん中で「ピノッキオ」を待ち受け、その鼻を掴んで捕まえ、ジェッペットに引き渡した。しかしそれを見物していた群集は、悪いのは厳しい折檻をする父親の方だと、無責任にもジェッペットを糾弾した。「ピノッキオ」は解放されて自由の身となり、

一方、群集の裁きによってなんの罪もないジェッベットが牢屋に入れられる。ジェッベットは、自分自身が創造した操り人形を、そのわがままな行動から救いだそうとしたに過ぎない。牢屋に向かいながら、あまりのことに、「しゃくりあげ、くちごもって言った。『あわれな息子だ！私は、いい操り人形にしてやろうと思って、どんなに苦勞したことか！』」¹²⁾

さて、父親の愛情から解放された「ピノッキオ」は、思いきり自由になって原っぱに駆けだしていく。「獵師に追いかけられた小山羊か小兎のように、高い土手であろうが、いばらの生垣であろうが、水のいっぱいいたまった溝（みぞ）であろうが、片っぱしから飛びこえ、飛びこえて行った」¹³⁾。家に辿りついた「ピノッキオ」は、解放された自分の自由の仕上げをするために、やさしく忠告する物言うコオロギを「うるさい」と言いながら、木鎚で一撃のもとに殺してしまう。

ここでコオロギの姿で描かれているのは、「ピノッキオ」の心の中に住む良心である。良心の命令には、好き嫌いにかかわりなしに耳を傾けなければならない。それが命じることには従うしかない。われわれは、人間の本性を否定することなしには、良心の命令を無視することができないからだ。しかし、そこで「ピノッキオ」が行なったのは、暴力的に良心を殺して沈黙させるやり方であった。

言葉を話すことのできるコオロギは、「私は、物言うコオロギです。この部屋にもう百年あまりも住んでいます」¹⁴⁾と言いながら、良心の道徳的命令が本質的に永遠のものであることを告げる。これに対して「でも、今日は、この部屋は僕のものなんだ。だから、すまないけど、今すぐ、さっさと出ていってくれよ」¹⁵⁾と「ピノッキオ」はコオロギにつめよる。父親の期待にこたえて良い子になりなさいと落ち着いた態度で説教する物言うコオロギに対して、愛情のためにを口実に教育をされるのはかなわないと「ピノッキオ」はその説得を拒否する。そして勉強なんかより、「ちょうちょうを追っかけたり、木によじのぼって鳥の巣からひな鳥をとったりする方が、ずうっと楽しい」「食って、飲んで、寝て、遊んで、朝から晩まで、ぶらぶら過ごす生活」¹⁶⁾が、僕が将来つきたい職業

だと述べる。

きみは、気の毒なおばかさんだ。「なぜって、きみは操り人形で、さらにもっと悪いことに、きみの頭は木できて¹⁷⁾いるからね」と言われて、「ピノッキオ」は思わずコオロギに木鎗の一撃をくらわすのだ。実に簡単に、良心は死んでしまった。「ピノッキオ」は「打ち殺すことまでは望んでいなかった」のに、コオロギは「即死させられ、壁にへばりついたままになってしまった¹⁸⁾」。しかし実際には、コオロギは完全に死んでしまったわけではなかった。姿を変えて、その後何度も現れるからである。

ところで、父親やコオロギの干渉の煩わしさから逃れることで、「ピノッキオ」は自由を手に入れ、それを十分に享受できるのだろうか。今や彼は、自由の中の主人公だ。はたして期待した通りの夢を思いのままに実現できるのだろうか。

「そのうちに、夜になってきた¹⁹⁾」。闇が訪れる。暗闇の中では、昼間の楽しい色彩がすべて消し去られ、それまで確実だと思われていた事柄が夢まぼろしのように思われてくる。闇は、興奮を鎮め、幻想を追い払い、容赦なく真実を指し示す。「ピノッキオ」は、夜のとばりの中で、空しさ、落胆、飢え、自己の心の暗黒を徹底的に体験させられる。そして敵意に満ちた闇に包まれて、自分が哀れで孤独な存在でしかないことをとことん反省しなければならない。「父に逆らって、家を飛び出したのは、僕が悪かったのだ²⁰⁾」。

さらに「ピノッキオ」は、飢えを通して、見せかけの自由という現実が与える空虚さを思い知る。飢えを満たしてくれると信じていたものが、きらびやかなまがいものでしかないことを知るからである。今、彼がおかれている状態は「ナイフでえぐられるようなひもじさだ。…かわいそうなピノッキオは、すぐさま、炉ばたにかけつけた。そこには、煮えたぎっている鍋がかけてある。鍋の中に何がはいっているかを見ようと思って、彼は、ふたを取ろうとした。ところが、なんということだろう。その鍋は、壁に描いてある絵に過ぎなかった²¹⁾」。真実の存在から見捨てられたこの部屋では、あらゆるものが見せかけの張子であり、絵に描かれた幻影でしかない。

「ピノッキオ」は、いよいよこらえようのない飢えにさいなまれる。「ああ、飢えるということは、なんと恐ろしい病気なんだろう！」²²⁾ その飢えは、父親がわれわれに与えてくれるパンを見捨てた者に対する正当な罰としての飢えだ。それは、自分自身を、そして父親を探し求めることによってしか癒されることも、満たされることもない実存的飢えなのだ。しかし、「ピノッキオ」は、とりあえず彼の欲望を満たすものを食欲に探す。「こちこちになったパンのかけらでも、パンのかわでも、犬のために取っておいた食べのこしの骨でも、かびのはえたトウモロコシのおかゆでも、魚の小骨でも、桜んぼの種でも、ともかく口に入れて噛めそうなものならなんでも」²³⁾ 探した。しかし「何一つ見つけ出せなかった。それこそ、本当に、何も見つけることができなかつた」²⁴⁾ のだ。

ところが、やっと、「ピノッキオ」は、ごみの山の中に一個の卵を見つけた。この卵のエピソードは、「ピノッキオ」がおかれた事態の本質を明確に示している。その卵は、かけがえのない彼のすべてであり、彼の絶対的支配のもとにおかれた唯一の財産である。操り人形が、当惑し、この卵をどのように料理するかで思い悩むのはよく理解できる。なにしろこの卵は、彼が思うようにすることのできる唯一のものなのだから。

「さて、どう料理したものだろう？ オムレツをつくろうかな？ … いや、お皿で焼くほうがいいだろう！ … いや、フライパンで揚げるほうが、もっとおいしいのではないだろうか？ それとも、半熟にしたらどうだろう？ いや、もっとも手っ取り早いのは、お皿か小鍋で目玉焼きにすることだ。早く食べたくてたまらないんだから！」²⁵⁾

しかし、その「ピノッキオ」の食べる楽しみは、はかない夢に終わる。彼が、卵の殻を割ったとたん、元気で陽気なひよこが卵から飛びだしてきたのだ。ひよこは、「ていねいにおじぎをして、言った。—— 本当にありがとうございます。ピノッキオさん。おかげで殻を割る手間がはぶけました。では、ご機嫌よう。みなさんによろしく！——」こう言い終わると、窓から飛び去った。²⁶⁾ 「ピノッキオ」が思い通りにできると思っていた卵さえも、彼のコントロールのおよぶ範囲の外にあったのだ。彼が獲得したと信じていた自由の中味はこの程度

のものでしかなかった。

Ⅲ 人間の弱さについての自覚

耐えられない飢餓感に突き動かされて、「ピノッキオ」は、ひょっとすると情け深い人に出会えるかもしれないと淡い期待をもって、深夜、近所の村にでかける。しかし、その夜は、「恐ろしい冬の夜であった」²⁷⁾。その夜のおぞましい経験を、「ピノッキオ」が後に父親ジェッペットに語る個所では「地獄の夜だ」²⁸⁾と記されている。〈冬の夜〉(una nottataccia d'inverno) と〈地獄の夜〉(una nottata d'inferno) ではインヴェールノ(冬)とインフェールノ(地獄)の一字違いである。これは新聞連載のオリジナルの文章が初版本にまとめられて出版された時の誤植によるものとされ、〈地獄の夜〉が正しいと今日ではされている。

いずれにせよ、雷雨の荒れ狂う夜であった。「真っ暗やみで、人っ子ひとり見かけなかった。どの店も閉まり、どの家の戸も閉められていた。窓までかたく閉め切られていた。通りには犬の子一匹みあたらない。まるで死者たちの国のようだった。」²⁹⁾そこは、すべて沈黙し、敵意に燃え、排除の雰囲気支配しているように見えた。

善良なはずの老人さえもが冷酷で残忍であった。「ピノッキオ」は、思い切って一軒の家の呼鈴を鳴らした。ナイト・キャップの老人が窓から顔を出して、こんな時間に何の用だと聞く。どうかパンを恵んでくださいと頼むと、老人は、しばらく待つようにと言う。間もなく、窓がまた開き、さっきの老人が窓の下に立つようにと言った。その通りにすると「ピノッキオ」は、いきなり「洗面器いっぱいの水を、頭から浴びせかけられた。そして、まるでしおれたゼラニウムの花の植木鉢のように、頭のとっぺんから爪先まで水でびしょりになってしまった」³⁰⁾。

父親のいない世界は悲痛である。この悪夢のような夜から逃れるために「ピノッキオ」は家に帰った。しかし、さらに深刻な不幸が彼を待ち受けている。

「ピノッキオは、疲れと空腹のためにくたくたになって、びしょぬれのひよこようになって家に帰ってきた。そしてまっすぐに立っている元気もないので、そのまま腰をおろすと、びしょびしょで、泥まみれの両足を、真っ赤に燃えた炭火の火鉢の上に乗せて、眠り込んでしまった」³¹⁾。

そして、当然の悲劇が起こる。「眠っている間に、木でできている両足に火がついて、それがだんだん焼けていって、とうとう、ピノッキオの両足は灰になってしまった。しかし、ピノッキオは、自分の両足があたかも誰かよその人のものでもあるかのように、大いびきをかいて、眠りつづけていた」³²⁾。

ここで、〈焼ける〉(carbonizzare) という動詞に注目しよう。カルボニツアーレとは、炭化する、炭になるように焼く、黒焦げにする、という意味の他動詞である。めらめらと勢いよく燃やすわけではない。長い時間をかけて焦げるように焼いて、ついには灰になってしまったのだ。それは、ちょっと油断していて、ふと、気がついてみたら焼けてしまっていたという瞬時の出来事のニュアンスとは異なる。

この場面は、われわれに深刻な問いかけを行なっている。「ピノッキオ」は、自分の生命にかかわる取り返しのつかない緊急事態の発生とその進行にまったく気がつかない。そして、まるで他人事のように眠りこけている。生活の多忙さを理由に、日常の慢性的疲労を口実に「ピノッキオ」は眠りこけている。彼は、人生のもっとも基本にある問題を自覚することも、見つめることもない。直ぐにはではないが、やがて、足に燃えついた火は、徐々に身体全体を焼き尽くし、ついには己の生命そのものを炭化してしまうだろう。このエピソードは、人間の生活における重大な問題へのわれわれの無自覚について語っているようだ。

大急ぎで救助を求めなければならない状態なのに「ピノッキオ」にはその自覚がまったくない。そのような「ピノッキオ」に救いの手をさしのべ、彼のおかれている悲惨さに気づかせてくれたのは、父親のジェッペットであった。ドアをノックする音に目を覚ました「ピノッキオ」は、目をこすり、あくびしながら「だれだい？」と問う。すると「『私だよ』と答える声³³⁾がした」。それは、

家に帰ってきたジェッベットの声だ。そのジェッベットによって「ピノッキオ」は自覚のない絶望的状态から救済されるのだ。

この、〈ある声が「それは、私だ」(Sono io.)と答えた〉、という言葉には意味深長な響きがある。エジプトにおける奴隷的状态からイスラエルの民を乳と蜜の流れるカナンの地に導くために、木の茂みの奥から炎のような形でモーセに現れた神の声は、「それは、私(あってある者)だ」(『出エジプト記』3. 14)であった。また、ユダに先導されてイエスを捕らえるためにやって来た兵卒たちに向かって発されたイエスの言葉が、「私が、そうだ」(『ヨハネによる福音書』18. 5)であった。この言葉の響きには、救済者的な荘厳さが伴う。そして、まさにこの声によって「ピノッキオ」は自分がおかれている悲惨さに気づくのだ。

父の声を聞いた「ピノッキオ」は、声のするほうへ急ごうとする。「ところが、二度三度よろよろしたかと思うと、床の上にはばったり大の字に倒れてしまった³⁴⁾」。せっかく、救済しようと手をさしのべてくれる人に、近づくことすらできないのだ。泣き叫び、自分を憐れみ、四つんばいになって這いずりまわり、固い床を転げまわっている。自由気ままに村を駆けまわった時間のなんと短かったことか。そこからは、サルヴェ・レジーナの祈りの言葉「われらちくたくの身なるエワのこなれば、御身に向いて呼ばわり、この涙の谷に泣き叫びて、ひたすら仰ぎ望み奉る」の声が、聞こえてくるようだ。

ジェッベットは、この哀れな自分の被造物を見て「かわいそうで胸がいっぱいになった。そこで、さっそく抱き上げて、キスをし、やさしく撫でたり、さすったりしはじめた³⁵⁾」。そして言う。「ピノッキオや、どうして足を焼いてしまったんだい?」。この〈ピノッキオや〉(Pinocchuccio mio!)という単語は、全編を通してここに一回だけしか用いられていない。それは、最大級の親愛の情を現した言葉である。あまりの痛ましさを目前に見て、ジェッベットは思わず〈私のピノッキウッチョオ!〉と嘆息とともに語りかけたのだった。反逆的なこの被造物に対して、ジェッベットの愛の心は変わらない。

しかし彼は、新しい足を欲しがる「ピノッキオ」を「半日ばかりは、勝手に

泣きわめかせておいた³⁷⁾。そこで泣いているのは、われわれ自身でもある。楽園を追放され墮落してしまってから、人間は、いつも悲嘆とともにあった。「本性において傷ついた者」(*vulneratus in naturaribus*)である人間は、悲嘆にくれながら、うめき、叫んで、絶対的存在に向かって本来的な自由が回復されるように訴え、かつ祈るよりほかに方法がない。「人間の本性は泣くことだ」(*sunt lacrimae rerum.*)という古人の言葉もある。

さて、ジェppetは、泣き叫んでいるこの哀れな「ピノッキオ」に人間の子どもと同じような装いをさせ、それなりの尊厳を与えてやるために「花模様のついた紙で粗末な着物を作ってやり、それから木の皮で靴を一足こしらえて、さいごに、パンのやわらかいところで小さな帽子を作ってやった³⁸⁾」。

この「花模様の紙の粗末な着物」は、創世記における「皮の着物」を思い起こさせる。聖書には、「アダムその妻の名をエバと名づけたり。そは彼女はすべてのいきものの母なればなり。エホバ神アダムとその妻のために皮衣(かわごろも)を作りて彼らに衣(き)せたまえり」(『創世記』3. 20-21)とある。また、この皮衣の象徴的意味について、4世紀に活躍したギリシア教父ニュッサのグレゴリウスは、「それは、性的結合、受胎、出産、養育、思春期、成年期、老年期、病氣、死を表すものだ³⁹⁾」と考えている。神の似姿としての人間の具体的な姿とその真実の本性が、この皮衣には重ね合わされているのだ。ちなみに、ニュッサのグレゴリウスは、マリアが「神の母」(テオトコス)であると述べたことでも知られている人物である。

新しい衣服をまとった「ピノッキオ」は、さっそく、水をいっぱい入れた洗面器に自分の姿を映してみ、自分の装いに大満足で、得意げに「僕、まるで紳士みたいだね！」と言う。それに対してジェppetが答えるのだ。「確かにそうだ。だが、よくおぼえておくんだよ。いい着物を着たって紳士になるわけじゃないよ。むしろ清潔な着物を着ているからこそ紳士なんだよ⁴⁰⁾」。円満な人柄であり、豊かな教養であり、深い知恵でもあるその「清潔な着物」という目標は、まだまだはるか彼方にある。「ピノッキオ」がそこに到達して、それをゆったりと羽織る日が到来するまでには、さらなる、はてしない旅が続けら

れなければならない。そしてその旅は、ようやく今始まろうとしているのだ。

IV 「目に見えない糸」と操り人形の自由

身なりを整えてもらった「ピノッキオ」は学校へ行きたいと言いだす。ジェットは、雪の降る寒い夜であったにもかかわらず、こっそり上着を古着屋に売ってお金を工面し、そのお金で「ピノッキオ」のためにわざわざ教科書を用意してやった。翌朝、新しい教科書をこわきにかかえた「ピノッキオ」は、学校への道すがら、ときめく嬉しさと、やさしい父親への真心からの感謝の気持ちから、さまざまなことを本気になって考え、心の中でひとりあれこれと一生懸命に自問自答を繰り返す。

「今日は、学校で読み方をすぐおぼえよう。それから明日は書き方で、明後日は算数だ。それから頭を使って自分の力で、お金をたくさん儲けるんだ。そして最初に手にしたお金で、お父さんに上等の布地でできた上着を作ってやるんだ。なに、なんてことを言うのだ、布地のだって？いや、とんでもない。金と銀の服地でできた、ダイヤモンドのボタンをつけた上着を作ってあげるんだ。あの気の毒なお父さんには、それくらいのことをしてあげなければならない。なにしろ、僕に本を買って、勉強をさせてくれるために、シャツ一枚きりになってしまっているのだから… こんなに寒いというのに！そんな犠牲まで払ってくれるのも、お父さんなればこそなんだ⁴¹⁾」。

「ピノッキオ」は、真剣であった。父親の自分への愛情に心から感動して、父親を喜ばすための崇高な目標についてあれこれ考えをめぐらしている。だがしかし、学校につく前に、その賞賛すべき計画の実現は、突然、放棄される事態となる。それどころか、学校へ行くというもっとも基本的な目的さえもうやむやになってしまう。というのは、学校へ行く道の途中で、にぎやかな笛とタイコの音が聞こえてきたからだった。操り人形の劇団が、この村にやって来たのである。

もちろん、「ピノッキオ」の心の中でどうすべきかの激しい葛藤がなかった

わけではなかった。この楽しそうな音楽は、いったいなんだろう。だが残念ながら、僕は、今日は学校へ行かなければならない。「ピノッキオ」は、最初のうちは、その興味をかきたてる珍しい音に振り向きもしないで道をひたすら急ぐ。ところが、そうこうするうちに「迷いが生じて、途方にくれてしまった。いずれにしろ彼は、学校に行くか、笛の音を聞きに行くか、を決めなければならなかった」。そして「今日は笛を聞きに行こう。学校は明日だ。学校ならい⁴²⁾つだって行けるもの」との最終的結論にいたったのだった。

彼の考えでは、学校がどこかへ逃げて行ってしまうことは、まずはないだろう。だが、人形劇団は移動してしまったらそれで最後だ。次の機会がいつのことになるかわからない。学校へだったら「いつだって時間がある」(c'è sempre tempo.)。「ピノッキオ」は、時間はいつでも「今しか」ないことに思っていたらいい。明日ということは、今日を否定することだ。決断は、今日、それも、たった今なされてこそ意味を持つのだ。そのことを、彼は経験の深まりとともに繰り返し学ばされることになる。

ところで、「ピノッキオ」にとって学校への道は、彼が人間的存在になるための長く続く基本的道程の一つであった。だが彼は、せつかく父親が苦労して準備してくれた教科書を、人形劇の入場料を支払うために売り払ってしまった。教科書は、理性を表す重要なシンボルだ。その理性を自ら手放すことは、自由の喪失の始まりを意味する。判断をゆくゆくは他者にゆだねることになり、仕えるべき主人をもつことになるだろうからだ。

人形劇場に入ると操り人形たちが熱演の最中である。アルレッキーノとプルチネッラが本物の人間とみまがうほどに上手に演じている。この二人の操り人形は、「まるで道理のわかる二匹の動物か、どこにでもいる二人の人間のように」⁴³⁾真に迫った演技を行っていた。しかし、彼らは、目に見えない糸によって操られている。その生活は、台本通りのせりふを定められた通りにしゃべるだけであり、自らの行動を自律的に判断し選択することはできない。彼らは自由という重荷からは解放されて気ままであるが、実際には奴隷の状態におかれている。

この寓話がわれわれに投げかけるアイロニーは痛烈だ。現代社会は、人間の形をした魂のないロボットたちを無数に生み出してしまった。見せかけの人間性のヴェールを剥ぎ取り人間の真実を描き出すために、たとえば芸術家たちは、断片化され解体された人間に焦点を当て、ロボットの人間を抉り出すためのさまざまな実験的手法を試みている。また、現代舞踏の振り付けは、機械的リズムと役者のぎこちない動きとによって操り人形と化した現代人を意識的に表現し、そのことで人間性の回復を訴えているようにも見える。

現代社会は、マス・メディアの時代だ。「目に見えない糸」が無数に張りめぐらされ、それが幾重にも交錯している。そして、われわれは、見せかけの自由という外観のもとに、無自覚のうちに操り人形に仕立て上げられている。この危機的状況の中で、日常的なコマーシャルリズムを通して、政治的、経済的、あるいは宗教的、文化的な巧妙な宣伝によって、自発的かつ積極的に自ら目に見えない糸に身をまかせる人々も量産されている。しかも、そのようにして生みだされた操り人形たちの存在は、不可避免的に人形遣いの到来を招くことになる。仕えるべきご主人様が、つまり支配し命令する権力者が出現することになるのだ。しかも重要なことは、人形遣いの出現が、先ず、最初に操り人形たちの存在を前提条件としている点である。人形劇場の描写は、そのような今日の現代社会批判を含んでいる。

さて、観客の中にいた「ピノッキオ」は、人形劇場の操り人形たちによって歓迎のために舞台の中央に引っ張り出されてしまった。そして、コメディーの演劇に熱中していた操り人形たちは、同類であるこの著名な木の仲間を迎えて大混乱におちいり、劇場は興奮のるつぼと化した。おかげで芝居は中断してしまった。そこで、営業を妨害されて激怒した人形遣いの親方の出現となる。彼は、芝居を台無しにしてしまった罰として「ピノッキオ」を薪代わりに使うことを思いつく。ちょうど、串刺しにされた一頭の牡羊を火の上でゆるりゆるりと回して、今夜の夕食用に焼き肉を準備中だった。こんがり焼き上げるためにはもう少し薪が必要であり、よく乾燥した「ピノッキオ」は火にくべるのにうってつけに見えた。ところが、いよいよ火に投げ込まれる直前に、「ピノッ

キオは、水から上げられたうなぎのように、身体をくねらせて、死にもの狂いになって絶叫した。— お父さん、助けてえ！僕は死にたくない、死にたくないよ！—⁴⁴⁾」。

人形遣いの親方は、見かけのいかめしいその面相とは裏腹に心根のやさしい人物だった。「ピノッキオ」に父親がいることを知り、心がなごみはじめる。「もしおれが、おまえをその燃えている炭火の中に放り込んだら、おまえの年とった親父さんは、たいへん悲しがることだろうな！かわいそうなじいさんだな！気の毒におもうよ！」⁴⁵⁾。そして親方は、続けて3回くしゃみをした。彼は、感動したり、心がうずきはじめると、くしゃみをする体質だった。

しかし、親方は、あくまで、おいしい焼き肉を仕上げることを考えている。そこで、「ピノッキオ」の身代わりにアルレッキーノが燃やされることになる。権力者であり支配者である人形遣いの親方は、次のような命令を下した。「あのアルレッキーノをぐるぐる巻きに縛って、ここへつれてこい。そして火の中に放り込んで、燃やしてしまえ。おれはこの牡羊を、どうしてもうまく焼きたいんだ」⁴⁶⁾。それを見た「ピノッキオ」は、自分だけが助かって仲間が自分の身代わりにされることを見過ごすわけにはいかない。そこで、アルレッキーノを助けるためにいろいろ手を尽くして親方を説得するが、権力を持つ者の常として親方は自己の利益以外のことに温情的な手心を加えるということはない。そこで「ピノッキオ」は決然として自己の態度表明を行なう。「『そういうことなら』とピノッキオは立ち上がって、パンの帽子を投げ捨てながら、激しく叫んだ。『そういうことなら、僕も、自分の義務がどういふものかを承知している。番兵さん、前進！僕を縛って、その炎の中に投げ込んでください！僕の親友の、気の毒なアルレッキーノが、僕の身代わりに死ななければならぬなんて、それは間違いだ』⁴⁷⁾」。

これを見た親方は、くしゃみを4回も5回も続けざまにしはじめた。氷のように固まっていた彼の心が軟らかになり、胸がキュンとなったのだ。「おまえは、じつに偉い子どもだ！ここに来て、おれにキスしておくれ」⁴⁸⁾と、親方は、「ピノッキオ」がすっかり気に入ってしまった。翌朝、「ピノッキオ」から、彼

の父親のジュッペットがどうしようもないほど貧乏人で、それなのに自分はシャツ一枚になりながら「ピノッキオ」に教科書を買ってくれた話を聞き、親方は「ピノッキオ」に言う。「気の毒に。おれは、なんだかわいそうでならないよ。さあ、ここに金貨が5枚ある。これをすぐお父さんのところへ持って行っておやり。おれから、くれぐれもよろしくと⁴⁹⁾いってな」。

「ピノッキオ」は、人形遣いの親方から許されて、芝居小屋から解放されることになった。だが彼の仲間の操り人形たちは人形劇団に永劫にとどまらなければならない。アルレッキーノもプルチネッラもパンタローネもロザウラ夫人も役者としては著名人であるが、彼らはそれ以外の人生を生きる可能性を持っていない。劇場の中で操り人形としてその一生を過ごすのみだ。「なぜなら、操り人形たちは、決して成長しないからだ。そして、彼らは、操り人形として生まれ、操り人形として生き、操り人形として死んでいくのだ⁵⁰⁾」。彼らには、自由を追い求める希望もなければ、魂を獲得する期待も存在しない。舞台生活の終わりには、多分、燃料として親方が食べる羊を焼く薪にくべられることになるだろう。操り人形も、「ピノッキオ」も木で作られているのに、その差異はどうして生まれるのだろうか。何がその運命を異なったものにしてしているのだろうか。「ピノッキオ」とその同類である操り人形たちとの決定的違いは、「ピノッキオ」が父親を持っているという事実にあった。「ピノッキオ」は、人形芝居の世界によって拘束されはしない。「ピノッキオ」は、自由に父親探しの旅を続けることができる。しかも、さらに彼は自分の真実の本性を探究する旅も続行しなければならないのだ。

V 誘惑者「キツネ」と「ネコ」の問いかけ

操り人形の一団に別れのあいさつを終えると、「ピノッキオ」は嬉しさにわれを忘れてわが家をめざして帰っていく。しかしそのわが家への帰還は、一瞬の出来事によって、無限に遠い道のりとなってしまった。父親から遠ざかるのは一瞬のことであったが、見失われた父親に出会うためには長く惨澹たる旅程

をへめぐらねばならない。

家に帰る道筋で、「ピノッキオ」を待ち受けていたのは、キツネとネコである。彼らは、一目でそれとわかるいかにもそれらしい古典的な「悪人」であり、外部の世界から純朴な人間を悪の道にいざなう者たちである。「ピノッキオ」は、これまで自己の内部にある弱点のために、反抗的で、落ち着きがなく、善いことをのぞみながら結果的には最悪の選択をしてしまう子どもでもあった。しかし、今回は、自己の内部的弱点ではなく、外部世界に存在する悪とはじめて出会うことになる。そして、彼はその悪人たちに魅了されてしまうのだ。

「ピノッキオ」は、「片足の不自由なキツネと両目ともに視覚障害で見えないネコに出会った。彼らは、不遇な仲のよい友達同士らしく、互いに助け合いながら、寄り添って、当てもなく歩いていた。足が不自由なキツネは、ネコにもたれて歩き、一方、目の見えないネコは、キツネに手を引かれていた⁵¹⁾」。あわれな姿を強調しながら人目にさらし、そうすることで同情をさそうプロたちである。彼らは親しげに「ピノッキオ」にあいさつをして、偶然、彼が5枚の金貨を持っていることを知った。するとその瞬間、「キツネは、無意識のうちに、麻痺しているように見せかけていた足をぐいとのぼし、ネコはネコで、両方の目をかっと見開いた。それはまるで緑の街灯のようだった。でも、すぐにまた閉じてしまったので、ピノッキオはまったく気がつかなかった⁵²⁾」。彼らは、さっそく、「ピノッキオ」のその金貨を巻き上げる仕事にとりかかる。

近くの生垣から、「ピノッキオ」が詐欺師たちの口車に乗せられそうになっているのを、はらはらして見守っている一羽の白ツグミがいた。その鳥は、思わず口に出してしまった。「ピノッキオさん、悪い仲間のすすめることなんかには、耳をかしてはいけませんよ。そんなことをすれば、あとできっと後悔しますよ⁵³⁾」。かわいそうなのはツグミである。よけいなことを言ったばかりに、言い終わるか終わらないほんの一瞬のうちに、跳びかかってきたネコにぱくりと食べられてしまった。ネコは食べおわると口をぬぐい、なにごともなかったかのように、また目を閉じてしまった。ツグミは見て見ぬ振りができなかったのだ。そして抹殺された。それは、まさに良心がたどるはかない運命であった。

キツネとネコが「ピノッキオ」に持ちかけてきたのは、金貨を増やすという話である。「きみは、そのけちな5枚ばかりの金貨を、百枚にも、千枚にも、二千枚にも増やしたくはないかい？」⁵⁴⁾。彼らが、ふくろうの国にある奇跡の原っぱに案内してくれると言う。その原っぱに行って、地面に小さな穴を掘り、その穴に金貨を播くだけでいい。そうすれば、一晩のうちに金貨の木が成長する。翌朝は、枝もたわわに鈴なりになった金貨を収穫するだけだという。

この話を聞いた「ピノッキオ」は、それをきっぱり断った。「僕はそこへは行かないよ。もう家の近くまで来てるんだ。僕は、お父さんが待っている家に帰るよ。かわいそうに、あの年取ったお父さんは、僕が家に帰らなかったから、昨日はずいぶん心配したことだろうな。僕は、残念ながら、本当に悪い子どもだった。物言うコオロギは、＜親の言うことを聞かない子は、この世の中では、けっして幸せにはなれない＞と言ったが、それは本当だった。僕は、それを自分で体験したんだ。多くの災難に会ったし、昨夜は、火喰い親方の家で危ない目にあうところだった。ブルブル。思い起こすだけで鳥肌が立つよ！」⁵⁵⁾

けなげに「ピノッキオ」は詐欺師たちに応戦する。しかし、キツネとネコはさすがに説得の術にたけている。「私たちは、卑しい欲張り根性で、こんなことをやっているわけではありません。ただ、人を金持ちにしてあげようと思って、やっているだけなんです」⁵⁶⁾。やりとりの後、ついに、「ピノッキオ」は「なんていい人たちなんだろう！」「さあ、すぐ行こう。僕は、君たちと一緒に行くよ」⁵⁷⁾とその気になってしまった。

さて、キツネとネコが行なった誘惑は、地上の楽園におけるヘビのやり方と同じであった。ヘビは女に「それを食べると、あなたがたの目が開(ひら)け、神のように善悪を知る者となる」(『創世記』3. 5)と言った。その論法は、われわれにすでに与えられ、われわれが享受している恩恵を、積極的な価値あるものとしてではなく、あたかも限界のあるもののように強調して誘惑する戦術である。アダムとイブはヘビの誘惑によって神から遠ざかることになった。同様に「ピノッキオ」も、手元の5枚の金貨に満足せず、父親から限りなく遠ざかることによってより大きな幸運を手中に収められると信じてしまったのだ。

現代の誘惑者たちも、多様なメディアを通して、連帯、公正、正義、平等、人権、環境など輝かしい言葉の旗印のもとに、「私たちは、ただ、他人のために役立つことを願って働いているのです」と隣人愛と共生を強調しながら、あるいは、善意の人々をうまくだまからかすことがあるかもしれない。

キツネとネコは、一人が発した言葉を別の一人が繰り返すという常套手段を駆使した。「ピノッキオ」が、今ポケットにあるこの金貨で父親には素晴らしい服を求め、自分は教科書を買って勉強したいのだと本当の気持ちを素直に語ったとき、キツネはせせら笑うように言った。「私をご覧ください。勉強なんかにはかばかしく夢中になったおかげで、片方の足を失ってしまったのです」。ネコも、たたみかけるようにその同じ言葉を繰り返して「私をご覧ください。勉強なんかにはかばかしく夢中になったおかげで、目が両方とも見えなくなりました⁵⁸⁾」と言っている。百年前の詐欺師たちも、十回繰り返すと、うそでも真実になるという現代のコマーシャルイズムの鉄則を熟知していたのだ。

「ピノッキオ」は、キツネとネコに案内されて歩きに歩いて、夕方ようやく旅館「赤えび亭」に到着する。休息して仮眠をとるためである。「ピノッキオ」の胸には、自分の選択と決断が間違っていたとの思いが重くのしかかっている。それでも彼は、その選択をやり直す勇気がない。夕食も、のどを通らず、注文したクルミー一個と一枚のパンさえも手をつけずに残すありさまである。一方、キツネとネコはご馳走を次々に注文して、贅沢三昧の食事を楽しんだ。どうせ勘定は「ピノッキオ」の金貨で支払われることになるからだ。

夜中の12時に、「ピノッキオ」は宿屋の主人に起こされた。連れのキツネとネコは、奇跡の原っぱで待っているとの伝言を残して、一足先に出発していた。宿屋から一歩外に出ると、一寸先も見えない真暗闇である。その夜は、物音一つせず、風のそよぎもない漆黒の闇である。人をおびえさせるような静寂が、あたりを支配している。その闇は、神も道徳も真理も死に絶えたたおぞましい暗黒の世界を象徴しているかのようであった。そして、すべての被造物が「ピノッキオ」が間違った道を進もうとするのを、息をひそめて見守っているかのようでもあった。闇の向こうに待ち構えているのは、正しい道を踏み外した無

分別な過ちの償いの死であることを「ピノッキオ」は知らない。

宿屋から出かけるとき、「ピノッキオ」は、「手探りで出発したと言ってもよいだろう。というのは、宿屋の外は真っ暗な闇で何も見えなかったからだ。原っぱ一带は静まりかえっていて、木の葉のかさりという葉ずれの音も聞こえない。ただ夜鳥が二三羽、生垣から生垣へ道を飛んで横切りながら、ピノッキオの鼻に翼をぶっつけてきた。ピノッキオは恐ろしさのあまり、思わず後ろに飛び下がった⁵⁹⁾」。

しばらく進むと、暗闇のなかのある一本の木の幹に、青白く、ぼんやりとくすんだ光を発している小さな生き物がいた。「ピノッキオ」が誰であるかを聞くと、その小動物は「私は、物言うコオロギの亡霊だ」と答える。コオロギの青白い光とあの世から聞こえてくるようなかぼそく弱々しい声が、闇の支配する世界に理性のかすかな風穴をあけてくれているように思われた。

コオロギは、父親ジェッペットが嘆き悲しんでいるから、宿屋で使ってしまった一枚の金貨の残り4枚の手持ちの金貨を持って、とにかくすぐに父親のところへ帰るようにと「ピノッキオ」に忠告する。それに対して「ピノッキオ」は、いやだ、明日はそれが二千枚の金貨に増えるのだ、とゆずらない。一日で他人を金持ちにしてやるなどと約束する連中は詐欺師にちがいない、気をつけろとコオロギも忠告を続ける。どのような説得に対しても、「ピノッキオ」が繰り返す言葉は「だって、僕は行ってみたいんだ」(Voglio andare avanti.)であった。きっと後悔することになりますよ、というコオロギの言葉に、「あいかわらずのお説教か。おやすみ、コオロギくん」(Le solite storie. Buona notte, Grillo.)と、ついに捨てぜりふを投げつけてしまった。物言うコオロギは、この最後の言葉を聞くと、「おやすみ、ピノッキオくん。夜露にぬれませぬように。暗殺者たちに会いませんように」と予言的なあいさつを言い終わると、突然に明かりが消えるように姿を消してしまうのだ。「ピノッキオ」の良心がまさに消滅しそうな状態にあるのに対応して、物言うコオロギの明かりの輝きもその勢いを失ってしまうのである。だが、物言うコオロギは、「ピノッキオ」の良心を奪還する試みを完全にあきらめたわけではない。

「ピノッキオ」は、人形一座の操り人形たちと違って行動を主体的に選択できる存在だ。しかし、彼は、自分の熟慮による決断で行動するよりも、成り行きに身をまかせて惨めな平穏さに安住することをのぞんでいる。どうやら彼には、与えられている自由がわずらわしく、主体的に判断することも、それを行動に移すことも苦手なようだ。そのために、闇の中に明かりを求め、たとえそれがかすかな光でも、それに向かって正しい道を模索するということはあえてしない。むしろ、新しい不安が出現するのを見えなくしてくれている暗闇を好んでいるようにさえ見える。なまじっか明るい光があると、辛い思いをして正しい道を探索しなければならなくなるからである。

「ピノッキオ」は、暗闇の中を歩きながら、世の中の大人や教師たちのお節介について考える。「僕たち子どもは、なんとみじめでなさけないのだろう！ だれもかれもが、僕たちを叱ったり、さとしたり、忠告したりするのだ。勝手に言わせておけば、みんながみんな、僕らのお父さんか先生のような顔をする⁶⁰⁾」。この彼の考えには、アンビヴァレントな意味が含まれている。先ずは、そこには、自らを深く顧みることなく安易に他者を批判する「ピノッキオ」自身の自己中心的な態度がみられる。しかし他方では、彼の考えは真実を言い当ててもいる。その矛先は、したり顔で教師や専門家を演じている人々へ向けられているからだ。自称教師や専門家たちはとめどもなくおしゃべりを繰り返すが、その言説は事態の核心の表層さえもかすりもしない。それでいて、教育的配慮や愛のむちという名の非教育的な教育を無自覚のうちに垂れ流しているのだ。「ピノッキオ」が訴えているのは、父親や教師を僭称して子どもの前に立ちふさがり、彼らの人生を蹂躪する大人たちへの批判である。それはまた、「真理を謙虚に追求する」態度の欠如に向けられた批判でもある。聖書にも見られるように、「地上のものを『父』と呼んではならない。あなたがたの父はただひとり、天におられる父だけである。また、あなたがたは『教師』と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただ一人、メシアだけである」(『マタイによる福音書』23. 9-10)。「ピノッキオ」は、ひたすら謙遜と畏敬の気持ちに満ちた生き方と真摯な姿勢を、大人たちに求めているように見える。

VI 「ピノッキオ」の死と再生

暗闇の中を進みながら、「ピノッキオ」はあれこれ考える。「僕が、あのうるさいコオロギの言うことに耳を傾けなかったものだから、あいつに言わせれば、僕にどんなに多くの災難がふりかかってくるかわからないという！暗殺者たちにも僕は出っくあさなければならぬとさ！⁶¹⁾ただ、暗殺者など僕は信じないし、今まで信じたこともない」。

ところが、実際に暗闇の中に二つの黒い人影が現れたのだ。彼らは、後から追っかけてきて「ピノッキオ」の両腕をつかみ、「財布をよこせ。さもないと、命がないぞ！」(O la borsa o la vita!)と脅した。彼らの中の背が低い方の暗殺者が、「ピノッキオ」が口の中に隠している金貨を取り出そうと、短刀の切っ先を使って固く閉じられた口をこじ開けようとする。すると、ピノッキオは、稲妻のような早業で相手の手に歯を立ててがぶりと噛みついた。そして、ひと噛みに付け根から噛みきってしまうと、それをぺっと吐き出した。ところが、彼が、地べたに吐き出したのが、なんと手ではなくて、ネコの足首だったのを知ったとき、ピノッキオがどんなにびっくりしたか想像してみたい⁶²⁾」。暗殺者たちは「ピノッキオ」を犬が兎を追いかけるように、執拗に追跡する。夜が明けはじめた。走りつづけて、ついに「ピノッキオ」はもう息が續かなくなった。

「そのとき、あたりを見回すと、濃い緑の木々の間を通して、ずうっと遠くのほうに、雪のように真っ白な小さな家が見えた。〈あの家に着くまで、息がつづいてくれば、助かるかもしれないぞ〉と、ピノッキオは心の中で言った⁶³⁾」。

黒い暗殺者たちにつきまとわれて逃げる「ピノッキオ」に、ようやくかすかな希望が見えてきた。それから2時間近く、無我夢中でへとへとになりながら走って、「ピノッキオ」はようやく小さな家の入口に着いた。しかし、ドアをノックするが何の返事も無い。暗殺者たちの、はあはあいう激しい息づかい

がしだいに近づいてくる。必死になって玄関を蹴ったり、頭をぶっつけたりしていると、「窓のところに、ひとりの美しい少女が姿を現した。青い髪の毛で、蠟人形のように顔の色は白くて、目は両方とも閉じ、胸のところで両手を組んでいる。その少女は唇を少しも動かさないうで、あの世から響いてくるような、弱々しい声でいった。〈この家にはだれもいません。みんな死んでしまったのです〉 〈わたしも死んでいるのです〉 〈わたしを連れにくるお棺を待っているのです〉⁶⁴⁾」。

「ピノッキオ」は、ついに暗殺者たちにえり首をつかまれる。固く食いしばった彼の口の中から金貨を取り出すのが困難だとがわかると、暗殺者たちは「ピノッキオ」を大きなカシの木に縛り首にして吊るした。「ピノッキオ」が口をあぐりあけて死んでしまうのを待ったためである。3時間の苦しみの上に、「ピノッキオ」は目を閉じる。

さて、作者のコッローディは、第15章で「ピノッキオ」の物語全体を終える予定でいた。そこで物語を打ち切るために上の縛り首の場面を描いて結論とし、行末に「終わり」と記して連載の完結の宣言を行なった。しかし、木でできた操り人形が縛り首になって死ぬという場面は、重々しい生命の終わりの表現でもある。それは、死という人間的な神秘を人形がわれわれと共有するという重要なテーマを含んでいた。つまり、木の「ピノッキオ」が、死ぬことによって人間になるという問題である。

このままの結論では、物語が終わったことにはならないとの少年少女の読者たちからの激しい抗議と連載継続の強い要望が出版社に寄せられた。小さな読者たちは、さまざまなヴェールをまとったシンボルを通してこの物語に最初から一貫してこめられていたメッセージと第15章の結末とが一致しないと抗議したのであった。コッローディはその強い要望を受け入れた。そして4ヶ月後に物語の連載が「子ども新聞」に再開された。その続編は第36章まで書き進められて、ようやく完結することになる。

コッローディは、はからずも死の神秘をテーマに取り上げてしまった。「ピノッキオ」は、息をいよいよ引き取る瞬間に「ああ、お父さん！……もしお父

さんが、ここにいてくださったら!……」(Oh babbo mio! se tu fossi qui!)とつぶやいた。その言葉の中には、父親に対するノスタルジアと逃げ去って行く自分の生命を父親にゆだねたいという強い願いを読み取ることができる。そして木に吊るされて死を迎える「ピノッキオ」の姿は暗示的である。それは、まさに十字架のキリストのイメージそのものである。そこから、われわれは「ピノッキオ」の死が、あらゆる人間の死と同様に、いのちの創造者と強く結びつけられていることを理解するのだ。

しかし同時に、せっかく「ピノッキオ」が人間としての人生に足を踏み入れ、新しい世界に旅立とうとするまさにその瞬間に、作者コッローディは死の儀式の導入によってこの物語を締めくくろうとしたのであった。読者たちが納得しなかったのは、まさにその点である。暗殺者たちに追いつめられて首吊りにされる直前に、「ピノッキオ」が木々の間から遠方に垣間見た白い小さな家は希望であり救済であった。その純白の家は、新たなる人生、現在とは異なる新たな世界、そして新しい生活への予感でもある。またそれは、暗闇の中を憂いさまよい、苦悩から抜け出そうと努力する「ピノッキオ」への最後の恵みであり、救済でもあるはずだった。たやすく手の届くものではないにしても、白い小さな家は存在するだけで救いの希望と期待を意味したのである。それなのに「ピノッキオ」は作者によって殺されてしまったのだ。

第16章は、4ヶ月の長い休止と著者によるお詫びの後に再開された。コッローディは、物語の自然な継続的展開を確保するために、仮死状態に陥っている「ピノッキオ」を冒頭に描くことによって新しい物語を始めている。作者は、第15章においては明らかに死んでしまった主人公を、前言をひるがえして「彼は、今やほとんど死んだように見えた」(pareva ormai più morto che vivo.)という表現によって生き返らせたのである。青い髪の少女も、仙女さまとして復活させられた。その仙女のイメージは、処女聖マリアを思わせる。仙女さまは、吊るされている木から哀れな操り人形を降ろさせ、自ら抱き上げて部屋に運ぶ。そしてすぐに、カラス、ふくろう、物言うコオロギの著名な三人の医者たちが呼ばれる。カラスとふくろうの二人の大先生は診察の結果について相互

に異なるおおげさで抽象的な所見を述べる。

「カラスが、最初に前に進み出て、ピノッキオの脈をとった。それから鼻にさわり、そのつぎには両足の小指にさわった。こうして、ていねいに診察してから、カラスはおごそかに言った。〈私の信ずるところでは、この操り人形はりっぱに死んでいる。だが、もしも不幸にして死んでいないとすれば、それはやはりこの人形が活着しているという、確かな徴候にちがいない〉。〈残念ですが〉とふくろうは言った。〈私は、わが高名な友人であり、同僚であるカラス氏のご意見に反対しなければならない。私の見たところでは、その反対に、操り人形はちゃんと活着している。しかし、もし不幸にして生きていないとすれば、それは本当に死んでいる証拠⁶⁵⁾にちがいない〉」。

ここには、人間の本当の病気を治療するのにほとんど役に立たない科学の姿が、皮肉をこめて描かれている。科学技術の進展によって、近代科学は近い将来にすべてを知るにいたるだろう。しかし、人間があたかも分解可能な部分品でもあるかのように医学による治療の対象とされるとき、人間の持つ神秘さは消え失せ、人間性も消えてしまう。人間がなぜ存在しなければならないのかについては、おそらく科学は永遠に口を閉ざしたままだろう。われわれが「人間の存在」という病を治療するために期待をつなぎ得るのは、どうやら物言うコオロギの活躍にかかっているように思われる。

再生した「ピノッキオ」は、ようやく本物の人間への道のりを歩きはじめた。彼は、これから食い詰め者の国、奇跡の原っぱ、間抜け落し（アッキアッパッチトゥルリ Acchiappacitrulli）の町（ちなみに、この名称は「チトゥルリ citrulli」（愚か者たち）を「アッキアッパレ acchiappare」（ひっ捕らえる）の合成語である）、働き蜂の国、おもちゃの国などを經由して、厳しく苦い冒険を続けなければならない。本物の人間になることは容易なことではない。

注

- 1) 『ピノッキオの冒険』の原典は、フェルトリネリ版古典文庫『ピノッキオ』
Universale Economica Feltrinelli I CLASSICI Carlo Collodi Pinocchio
Introduzione e commento critico di Fernando Tempesti. Feltrinelli,

1993. に拠った。『ピノッキオ』の引用は、すべて本書から行なった。

“Questa volta il povero maestro Ciliegia cadde giù come fulminato. Quando riaprì gli occhi, si trovò seduto per terra. Il suo viso pareva trasfigurato, e perfino la punta del naso, di paonazza come era quasi sempre, gli era diventata turchina dalla gran paura.” *capitolo 1*, p. 23.

- 2) “Che ci sia nascosto dentro qualcuno?” *capitolo 1*, p. 22.
- 3) “Ho pensato di fabbricarmi da me un bel burattino di legno; ma un burattino meraviglioso, che sappia ballare, tirare di scherma e fare i salti mortali.” *capitolo 2*, pp. 25-26.
- 4) “Che nome gli metterò?” *capitolo 3*, p. 30.
- 5) “Birba d’un figliuolo! Non sei ancora finito di fare, e già cominci a mancar di rispetto a tuo padre! Male, ragazzo mio, male!” *capitolo 3*, p. 32.
- 6) “Fatti gli occhi, figuratevi la sua meraviglia quando si accorse che gli occhi si muovevano e che lo guardavano fisso fisso.” *capitolo 3*, p. 31.
- 7) “La bocca non era ancora finita di fare, che cominciò subito a ridere e a canzonarlo.” *capitolo 3*, p. 31.
- 8) “Sentì arrivarsi un calcio sulla punta del naso.” *capitolo 3*, p. 32.
- 9) “Me lo merito! — disse allora fra sè. — Dovevo pensarci prima! Oramai è tardi!” *capitolo 3*, p. 31.
- 10) “Geppetto lo conduceva per mano per insegnargli a mettere un passo dietro l’altro.” *capitolo 3*, p. 32.
- 11) “Quando le gambe gli si furono sgranchite, Pinocchio cominciò a camminare da sè e a correre per la stanza; finché, infilata la porta di casa, saltò nella strada e si dette a scappare.” *capitolo 3*, p. 32.
- 12) “Balbettava singhiozzando: -Sciagurato figliuolo! E pensare che ho penato tanto a farlo un burattino per bene! *capitolo 3*, p. 35.
- 13) “nella gran furia del correre saltava greppi altissimi, siepi di pruni e fossi pieni d’acqua, tale e quale come avrebbe potuto fare un capretto o un leprottino inseguito dai cacciatori.” *capitolo 4*, p. 36.
- 14) “Io sono il Grillo-parlante, e abito in questa stanza da più di cent’anni.” *capitolo 4*, p. 38.
- 15) “Oggi però questa stanza è mia, e se vuoi farmi un vero piacere, vattene subito, senza nemmeno voltarti indietro.” *Capitolo 4*, p. 38.

- 16) "Mi diverto più a correre dietro alle farfalle e a salire su per gli alberi a prendere gli uccellini di nido." "Quello di mangiare, bere, dormire, divertirmi e fare dalla mattina alla sera la vita del vagabondo." *capitolo 4*, p. 39.
- 17) "Perché sei un burattino e, quel che è peggio, perché hai la testa di legno." *capitolo 4*, p. 40.
- 18) "Forse non credeva nemmeno di colpirlo." "rimase lì stecchito e appiccicato alla parete." *capitolo 4*, p. 40.
- 19) "Intanto incominciò a farsi notte..." *capitolo 5*, p. 41.
- 20) "Ho fatto male a rivoltarmi al mio babbo e a fuggire di casa." *capitolo 5*, p. 42.
- 21) "una fame da tagliarsi col coltello. ...Il povero Pinocchio corse subito al focolare, dove c'è una pentola che bolliva e fece l'atto di scoperchiarla, per vedere che cosa ci fosse dentro, ma la pentola era dipinta sul muro. *capitolo 5*, p. 41.
- 22) "Oh! Che brutta malattia che è la fame!" *capitolo 5*, p. 42.
- 23) "in cerca di un po' di pane, magari un po' di pane secco, un crosterello, un osso avanzato al cane, un po' di polenta muffita, una lisca di pesce, un nocciolo di ciliegia, insomma qualche cosa da masiticare: " *capitolo 5*, p. 42.
- 24) "ma trovò nulla, il gran nulla, proprio nulla." *capitolo 5*, p. 42.
- 25) "E ora come dovrò cuocerlo? Ne farò una frittata? ... No, è meglio cuocerlo nel piatto! ... O non sarebbe più saporito se lo friggessi in padella? O se invece lo cuocessi a suo uovo da bere? No, la più lesta di tutte è di cuocerlo nel piatto o nel tegamino: ho troppa voglia di mangiarmelo! " *capitolo 5*, pp. 43-44.
- 26) "un pulcino tutto allegro e complimentoso, il quale facendo un bella riverenza disse: - Mille grazie, signor Pinocchio, d'avermi risparmiata la fatica di rompere il guscio! Arrivedella, stia bene e tanti saluti a casa!" *capitolo 5*, p. 44.
- 27) "Per l'appunto era nua nottataccia d'inverno." *capitolo 6*, p. 46.
- 28) "è stata una nottata d'inferno." *Capitolo 7*, p. 51.
- 29) "Ma trovò tutto buio e tutto deserto. Le botteghe erano chiuse; le porte di casa chiuse; le finestre chiuse, e nella strada nemmeno un cane. Pareva il paese dei morti." *capitolo 6*, p. 47.
- 30) "sentì pioversi addosso un'enorme catinellata d'acqua che lo annaffiò

- tutto dalla testa ai piedi, come se fosse un vaso di giranio appassito." *capitolo 6*, p. 48.
- 31) "Tornò a casa bagnato come un pulcino e rifinito dalla stanchezza e dalla fame: e perché non aveva più forza da reggersi ritto, si pose a sedere appoggiando i piedi fradici e impillaccherati sopra un caldano pieno di brace accesa. E lì si addormentò." *capitolo 6*, pp. 48-49.
- 32) "e nel dormire, i piedi che erano di legno gli presero fuoco e adagio adagio gli si carbonizzarono e diventarono cenere. E Pinocchio seguitava a dormire e a russare, come se i suoi piedi fossero quelli d'un altro." *capitolo 6*, p. 49.
- 33) "—Sono io—rispose una voce." *capitolo 6*, p. 49.
- 34) "ma invece, dopo due o tre traballoni, cadde di picchio tutto lungo disteso sul pavimento." *capitolo 7*, p. 50.
- 35) "allora senti intenerirsi; e presolo subito in collo, si dette a baciarlo e a fargli mille carezze e mille moine." *capitolo 7*, p. 51.
- 36) "Pinocchiuccio mio! Com'è che ti sei bruciato i piedi?" *capitolo 7*, p. 51.
- 37) "lo lasciò piangere e disperarsi per una mezza giornata:" *capitolo 8*, p. 56.
- 38) "gli fece allora un vestituccio di carta fiorita, un paio di scarpe di scorza d'albero e un berrettino di midolla di pane." *capitolo 8*, pp. 58-59.
- 39) G. Biffi, *Contro Maestro Ciliegia*, Jaca Book, 1977, p. 66.
- 40) "—Davvero,—replicò Geppetto,—Perché, tienlo a mente, non è il vestito bello che fa il signore, ma è piuttosto il vestito pulito." *Capitolo 8*, p. 59.
- 41) "Oggi, alla scuola, voglio subito imparare a leggere: domani poi imparerò a scrivere, e domani l'altro imparerò a fare i numeri. Poi colla mia abilità guadagnerò molti quattrini e coi primi quattrini che mi verranno in tasca, voglio subito fare al mio babbo una bella casacca di panno. Ma che dico di panno? Gliela voglio fare tutta d'argento e d'oro, e coi bottoni di brillanti. E quel pover'uomo se la merita davvero: perché, insomma, per comprarmi i libri e per farmi istruire, è rimasto in maniche di camicia ... a questi freddi! Non ci sono che i babbi che sieno capaci di certi sacrifici!" *capitolo 9*, pp. 62-63.

- 42) "E rimase lì perplesso. A ogni modo, bisognava prendere una risoluzione: o a scuola, o a sentire i pifferi." "Oggi anderò a sentire i pifferi, domani a scuola: per andare a scuola c'è sempre tempo." *capitolo 9*, p. 63.
- 43) "come se fossero proprio due animali ragionevoli e due persone di questo mondo." *capitolo 10*, p. 67.
- 44) "il quale, divincolandosi come un'anguilla fuori dell'acqua, strillava disperatamente: — Babbo mio salvatemi! Non voglio morire, non voglio morire!" *capitolo 10*, p. 70.
- 45) "Chi lo sa che dispiacere sarebbe per il tuo vecchio padre, se ora ti facessi gettare fra que'carboni ardenti! Povero vecchio! Lo compatisco!" *capitolo 11*, p. 73.
- 46) "Pigliatemi lì quell'Arlecchino, legatelo ben bene, e poi gettatelo a bruciare sul fuoco. Io voglio che il mio montone sia arrostito bene!" *capitolo 11*, p. 74.
- 47) "— In questo caso, — gridò fieramente Pinocchio, rizzandosi e gettando via il suo berretto di midolla di pane—in questo caso conosco qual è il mio dovere. Avanti, signori giandarmi! Legatemi e gettatemi là fra quelle fiamme. No, non è giusta che il povero Arlecchino, il vecchio amico mio, debba morire per me!..." *capitolo 11*, p. 75.
- 48) "Tu sei un gran bravo ragazzo! Vieni qua da me e dammi un bacio." *capitolo 11*, p. 75.
- 49) "Povero diavolo! Mi fa quasi compassione. Ecco qui cinque monete d'oro. Vai subito a portarglielo e salutalo tanto da parte mia." *capitolo 12*, p. 78.
- 50) "Perché i burattini non crescono mai. Nascono burattino, vivono burattino e muoiono burattini!" *capitolo 25*, p. 174.
- 51) "incontrò per la strada una Volpe zoppa da un piede e un Gatto cieco da tutt'e due gli occhi, che se ne andavano là là, aiutandosi fra di loro, da buoni compagni di sventura. La Volpe, che era zoppa, camminava appoggiandosi al Gatto: e il Gatto che era cieco, si lasciava guidare dalla Volpe." *capitolo 12*, p. 78.
- 52) "la Volpe, per un moto involontario, allungò la gamba che pareva rattappata, e il Gatto spalancò tutt'e due gli occhi, che parvero due lanterne verdi: ma poi li richiuse subito, tant'è vero che Pinocchio non si accorse di nulla." *capitolo 12*, p. 80.

- 53) "Pinocchio, non dar retta ai consigli dei cattivi compagni: se no, te ne pentirai!" *capitolo 12*, p. 80.
- 54) "Vuoi tu, di cinque miserabili zecchini, farne cento, mille, duemila?" *capitolo 12*, p. 82
- 55) "No, non ci voglio venire. Oramai sono vicino a casa, e voglio andarmene a casa, dove c'è il mio babbo che m'aspetta. Chi lo sa, povero vecchio, quanto ha sospirato ieri, a non vedermi tornare. Pur troppo io sono stato un figliuolo cattivo, e il Grillo-parlante aveva ragione quando diceva: i ragazzi disobbedienti non possono aver bene in questo mondo." E io l'ho provato a mie spese, perché mi sono capitate dimolte disgrazie, e anche ieri sera in casa di Mangiafoco, ho corso pericolo...Brrr! Mi viene i bordoni soltanto a pensarci!" *capitolo 12*, p. 82.
- 56) "Noi non lavoriamo per il vile interesse; noi lavoriamo unicamente per arricchire gli altri." *capitolo 12*, p. 84.
- 57) "Che brave persone!" "Andiamo subito. Io vengo con voi." *capitolo 12*, p. 85.
- 58) "Guarda me! Per la passione sciocca di studiare ho perduto una gamba." "Guarda me! Per la passione sciocca di studiare ho perduto la vista di tutti e due gli occhi." *capitolo 12*, p. 80.
- 59) "Ma si può dire che partisse a tastoni, perché fuori dell'osteria c'era un buio, che non ci si vedeva da qui a lì. Nella campagna all'intorno non si sentiva alitare una foglia. Solamente alcuni uccellacci notturni, traversando la strada da una siepe all'altra, venivano a sbattere le ali sul naso di Pinocchio, il quale facendo un salto indietro per la paura..." *capitolo 13*, p. 90.
- 60) "come siamo disgraziati noi altri poveri ragazzi. Tutti ci sgridano, tutti ci ammoniscono, tutti ci danno dei consigli. A lasciarli dire, tutti si metterebbero in capo di essere i nostr babbi e i nostri maestri: tutti: anche i grilli-parlanti." *capitolo 14*, p. 92.
- 61) "perché io non ho voluto dar retta a quell'uggioso di Grillo, chi lo sa quante disgrazie, secondo lui, mi dovrebbero accadere! Doveri incontrare anche gli assassini! Meno male che agli assassini io non ci credo, né ci ho creduto mai." *capitolo 14*, p. 92.
- 62) "ma, Pinocchio, lesto come un lampo, gli azzannò la mano coi denti, e dopo avergliela con un morso staccata di netto, la sputò; e

- figuratevi la sua meraviglia quando, invece di una mano, si accorse di avere sputato in terra uno zampetto di gatto." *capitolo 14*, p. 96.
- 63) "quando nel girare gli occhi all'intorno vide fra mezzo al verde cupo degli alberi biancheggiare in lontananza una casina candida come la neve.—Se io avessi tanto fiato da arrivare fino a quella casa, forse sarei salvo, - disse dentro di sé." *capitolo 15*, p. 99.
- 64) "Allora si affacciò alla finestra una bella bambina, coi capelli turchini e il viso bianco come un'immagine di cera, gli occhi chiusi e le mani incrociate sul petto, la quale senza muovere punto le labbra, disse con una vocina che pareva venisse dall'altro mondo:— In questa casa non c'è nessuno. Sono tutti morti. — Sono morta anch'io. - Aspetto la bara che venga a portarmi via.—" *capitolo 15*, pp. 100-101.
- 65) "il Corvo, facendosi avanti per il primo, tastò il polso a Pinocchio: poi gli tastò il naso, poi il dito mignolo dei piedi: e quand'ebbe tastato ben bene, pronunziò solennemente queste parole:— A mio credere il burattino è bell'e morto.: ma se per disgrazia non fosse morto, allora sarebbe indizio sicuro che è sempre vivo!—Mi dispiace —disse la Civetta—di dover contraddire il Corvo, mio illustre amico e collega: per me, invece, il burattino è sempre vivo; ma se per disgrazia non fosse vivo, allora sarebbe segno che è morto davvero." *capitolo 16*, p. 110.

